

## 青年期全体における親子間の心理的距離の変化と 青年の自我発達との関連性

田中 敏 信州大学学術研究院教育学系教育科学グループ

上村桃香 信州大学大学院教育学研究科学学校教育専攻臨床心理学専修

### 概要

本研究の目的は、青年前期から中期・後期にわたる親子間の心理的距離の変化を調べ、それと青年の自我発達との関連性を検討することであった。大学生 95 人を対象とした分析から親子間の心理的距離に 4 つの異なる変化パターンがあることを見いだした。このうち青年期全体を通して親子間の距離が減少するパターンと変化しないパターンが対象者全体の約 8 割を占めた。前者の青年たちでは父母との心理的距離の変化と彼らの将来志向性や自尊性・他者尊重性の発達に関連が見られたが、後者の青年たちではそうした関連は全く見られなかった。この結果から、両者を識別せずにコミにしたサンプリングは互いの特徴を相殺するおそれがあることが示唆された。

**キーワード：**青年期, 親子関係, 心理的距離, 自我発達

### 問題

青年期の自尊感情やアイデンティティ達成に対して、近年、親子間の相互作用または親子間コミュニケーションの観点からのアプローチが注目されており、一定の知見が得られている。親が子にかけける期待について親の期待とその期待に対する子の受容・肯定の程度が子のアイデンティティ達成に影響することが示されている（仲野・桜本, 2005; 庄司・藤田, 2000）。また、親子間の親和性尺度やコミュニケーション尺度と、子のアイデンティティや自尊感情などの自己概念の測度との正の相関も、強いとはいえないまでも安定的に見いだされている（藤田・岡本, 2009; 高橋, 2008, 2009）。先行研究は概して大学生すなわち青年後期を対象としたものが多いが、青年前期の中学生を対象とした研究（高橋, 2001）や中学・高校時代の第二反抗期を取り上げた研究（石川, 2013）も親子関係と自我発達との一定の関連性を報告している。

これらの研究結果は、親子関係と子の自我発達との関連性を示すとともに、その関連性が青年前期から始まり中期・後期にかけて長期間継続することを示唆している。当然のことながら、この期間、親子関係の様態は一定不変のまま推移するとは思われず、子の自我

発達と呼応して相当の動揺や変容を生じるのではないだろうか。水本・山根（2011）は女子大学生を対象に母娘関係のタイプを調べた結果、4 類型を見いだし、この類型の組み合わせにより（母子）密着型から自立型への変化と、（母子）依存葛藤型から母子関係疎型への変化の2つの発達経路が存在するのではないかと推測している。しかし、それを直接的に実証するデータは得られていない。そこで、本研究は、青年期全体にわたる親子関係の継続的变化の実態を明らかにし、そのうえで親子関係の変化と子の自我発達との関連を実証的に探ることを目的とした。

その際、青年前期・中期・後期の親子関係の変化を調べるために同一の質問項目を各時期で繰り返し提示する方法を用いることには大きな困難が予想された。たとえば「親はあなたのやりたいことを理解してくれましたか」という質問に対する中学生、高校生、大学生のときの3時期の回答を対象者に求めることは対象者の負担が過剰になることが懸念される。しかも、これを母親と父親について尋ねることになる。一般に親子関係の測定尺度の項目数は少ないものでも10～15個、ふつうに20個以上あるので、全体の項目数は単純にその6倍（青年期3時期×父母）になる。さらに親子関係の質問に加えて、対象者自身の自我発達に関する質問も提示することになるので、同じような多数の質問項目に繰り返し回答する対象者の疲労と飽和の大きさは想像に難くない。それによるデータの信頼性・妥当性の低下も相当になるだろう。そうした理由のゆえに、青年期全体を通した親子関係の変化の測定は、これまで意図されることはあっても実施上は困難であったと考えられる。

そこで、本研究では、こうした方法上の問題を克服するため親子関係の変化を表す端的な指標として親子間の心理的距離の変化に注目することにした。心理的距離の測度は、対人関係を距離イメージに置き換えるだけなので、質問文の内容の読解と意味的判断を求める通常の質問項目よりも対象者の回答負担が少ないと考えられる。青年期全体を通じての親子関係の連続的变化の様相を心理的距離によってとらえることを本研究は試みる。

## 方法

**対象者** 大学生102人（学部2～4年生、19～25歳、男子47人、女子55人）。

**質問紙** 学年、年令、性別、家族構成を尋ねる質問の後、自尊感情尺度、心理的自立尺度、心理的距離尺度をこの順番で提示した。自尊感情尺度は桜井（2000）を参考に4項目、また心理的自立尺度は高坂・戸田（2006）を参考に9項目を採用し（表1参照）、5段階尺度の評定を求めた。

心理的距離尺度は独自に作成した。表2に一例を示す。表2の例は、母親との現在（大学生のとき）の心理的距離、高校生のときの心理的距離、中学生のときの心理的距離を尋ねる質問文と評定尺度である。現在の心理的距離は「とても近い」から「とても遠い」までの7段階評定、高校・中学時代の心理的距離は「とても近かった」から「とても遠かった」までの5段階評定とした。父親との心理的距離を尋ねるバージョンも同様である。こ



表 1 自尊感情尺度と心理的自立尺度の項目

1. 自分の意見をはっきりと言うことができますか。
2. だいたいにおいて、自分に満足していますか。
3. 相手がどんな気持ちでいるかわかるほうですか。
4. つい感情にまかせて行動することがありますか。\*
5. 独力で物事を決めるほうですか。
6. 悲しみや怒りなどを人によく話すほうですか。\*
7. 自分の将来に不安を感じますか。\*
8. 物事に取り組むとき周りの人と協力しようと思いますか。
9. 自分は役に立たない人間だと思えますか。\*
10. 人にやさしくしたいと思っていますか。
11. 自分には、自慢できるところがありますか。
12. 自分の将来を具体的に想像できますか。
13. もっと自分自身を尊敬できるようになりたいですか。\*

注：項目 2, 9, 11, 13 は自尊感情尺度、項目 1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 12 は心理的自立尺度。\* 印は反転項目を表す。

の父親・母親との心理的距離の質問項目は質問紙毎に提示順序を入れ替えた。

**手続き** 調査は大学の授業終了後の休み時間を利用し集団に実施した。対象者に個人情報に関わる回答を求めるため質問紙の表紙には倫理的配慮を趣旨とした次のような文を記載し、かつ口頭で読み上げた。「この研究への参加は全くの任意です。あなたの自由な意思が尊重されます。研究に参加しないことによって不利益な対応を受けることはありません。また、研究への参加の有無が学業成績や単位の認定に影響を与えることは、一切ありません。いったん参加に同意した場合でも、いつでも不利益を受けることなく同意を撤回することができます。その場合、提供していただいたデータは廃棄され、それ以降はそれらの情報が研究のために用いられることもありません。」口頭の読み上げの後、自分自身の意思や都合で自由に退室してかまわない旨を伝え、約 3 分の時間を取り、退室者がいなくなったことを確認した後、調査を実施した。なお、本研究は信州大学教育学部研究委員会による倫理審査において承認を得ている（管理番号: H27-12）。

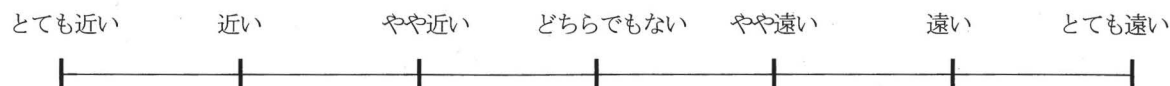
### 結果と考察

対象者 102 人から回収した質問紙のうち無回答の項目があった質問紙を除外した。最終的に分析対象となった者は 95 人（男子 45 人、女子 50 人）であった。以下、まず心理

表2 心理的距離尺度項目の例（母親との心理的距離を尋ねる場合）

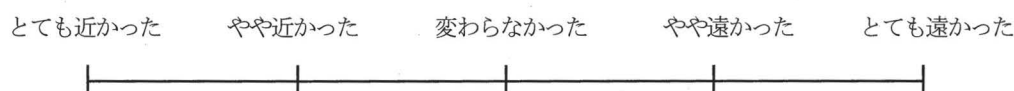
（1）あなたと、あなたの母親または女性の保護者との心理的な距離はどのくらいですか。  
現在の状況に当てはまるところに○をつけてください。ご自身の個人情報に関する内容  
 ですので、お答えいただける範囲内でお答えください。全くの任意であり無記入でもけっ  
 こうです。

あなたの位置から



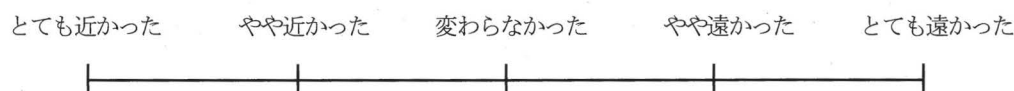
（2）高校時代のことを思い浮かべてください。あなたと、あなたの母親または女性の保  
 護者との心理的な距離は現在と比べて違っていましたか。当てはまるところに○をつけて  
 ください。ご自身の個人情報に関する内容ですので、お答えいただける範囲内でお答えく  
 ださい。全くの任意であり無記入でもけっこうです。

現在の位置より



（3）中学時代のことを思い浮かべてください。あなたと、あなたの母親または女性の保  
 護者との心理的な距離は高校時代と比べて違っていましたか。当てはまるところに○をつ  
 けてください。ご自身の個人情報に関する内容ですので、お答えいただける範囲内でお答  
 えください。全くの任意であり無記入でもけっこうです。

高校時代の位置より



的距離を分析し、次に自尊感情・心理的自立の評定値を分析し、そして両者の関連性を検  
 討する。

### 心理的距離の分析

父親・母親（男性の保護者・女性の保護者を含む）に対する現在（大学生のとき）の心  
 理的距離の評定「とても近い」を1点とし、「とても遠い」を7点として7段階で得点化  
 した。この現在の距離に対して、高校生のときの心理的距離の評定「現在の位置よりとて  
 も近かった」から「現在の位置よりとても遠かった」を-2, -1, 0, 1, 2の5段階で得点化  
 した（0は「変わらなかった」）。これは変化量を表す得点となる。同様に、中学生のと

きの心理的距離の評定値も変化量として「高校時代の位置よりとても近かった」を  $-2$ 、「高校時代の距離よりとても遠かった」を  $+2$  として 5 段階で得点化した。

この後、大学生のときの心理的距離に高校生ときの得点（変化量）を加算し、高校生時点の心理的距離を算出した（実質減算となるケースを含む）。同様に、高校生の心理的距離に中学生のときの得点（変化量）を加算し、中学生時点の心理的距離を算出した。表 3 は、対象者の男女別に父母との心理的距離得点の平均を中学生・高校生・大学生の時期別に示したものである。

表 3 大学生男女の父母との心理的距離得点の各時期の平均と標準偏差

	父親との距離			母親との距離		
	中学生	高校生	大学生	中学生	高校生	大学生
男子 (N=45)						
Mean	4.133	3.978	3.778	3.044	2.778	2.733
S.D.	2.232	1.815	1.475	1.705	1.347	1.156
女子 (N=50)						
Mean	4.060	3.940	3.740	2.680	2.560	2.560
S.D.	2.527	1.931	1.549	1.984	1.417	1.033

注：数値は大きいほど心理的距離が大きいことを表す。

対象者の性別（男女）×親の性別（父母）×青年期 3 時期（中高大）の 3 要因混合計画の分散分析の結果、一次・二次の交互作用は全て有意でなく（ $p_s > 0.40$ ），対象者の性別の主効果も有意でなかった（ $F < 1.0$ ）。

親の性別（父母）の主効果が有意であり（ $F(1,93) = 43.595$ ,  $p = 0.000$ , *effect size*  $f = 0.685$ ），母親との心理的距離が父親との心理的距離よりも全般的に小さいことが明らかになった。また，青年期 3 時期の主効果も有意だった（ $F(1,93) = 4.654$ ,  $p = 0.011$ , *effect size*  $f = 0.224$ ）。中学生・高校生・大学生のときの心理的距離の平均値はそれぞれ 3.47, 3.31, 3.20 と減少し， $t$  検定を用いた多重比較によると，中学生より高校生時点の心理的距離が有意に小さく（*adjusted*  $p = 0.018$ , 両側検定），さらに高校生より大学生時点の心理的距離も有意に小さくなる傾向があった（*adjusted*  $p = 0.062$ , 両側検定）。なお， $p$  値の調整は BH 法（Benjamini & Hochberg, 1995）による（以下同様）。

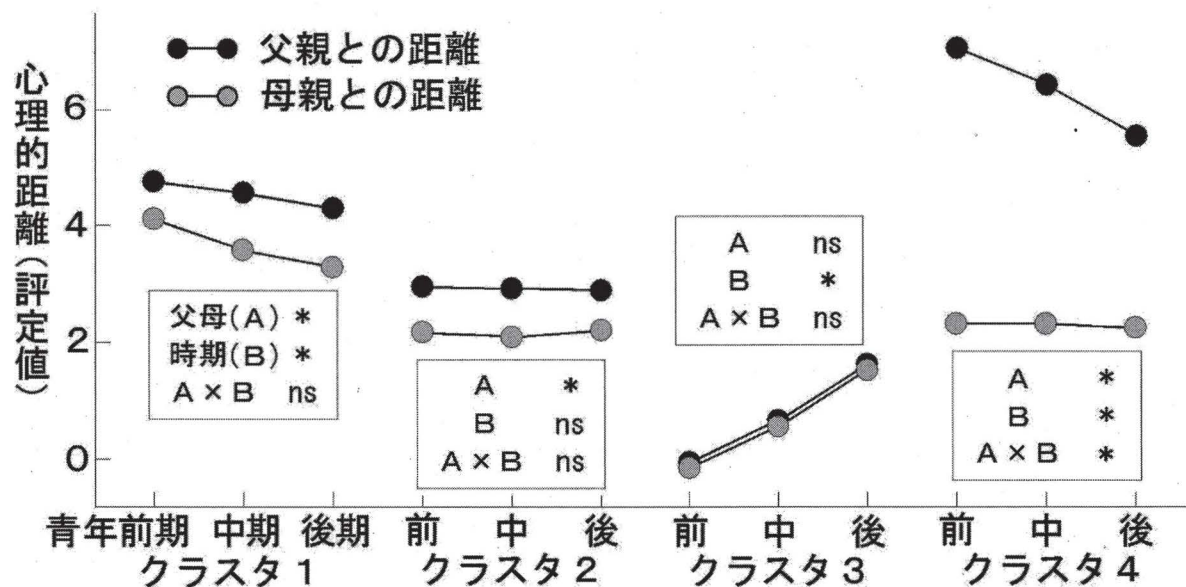
親の性別の主効果として，全体として青年と母親との心理的距離が父親との距離より小さいことが見いだされた。これは先行研究と一致する結果である。Gjerde & Shimizu (1995) によると，日本の青年は父親との結びつきより母親との結びつきが強く，母親との親子関係のほうに青年期の適応に大きく影響するということである。また，杉村ほか (2013) は「重要な他者」として母親を選んだ大学生の群においてのみ親への信頼と青年

のアイデンティティ次元とが関連することを報告している。

一方、青年期3時期の主効果として、親子間の心理的距離が青年前期から中期・後期にかけて小さくなる発達的变化が見られた。しかし、これは全ての青年に当てはまる一律の傾向というより、多数派の傾向が析出されたと考えるべきだろう。

そこで、青年期3時期の父母との心理的距離（6変数）を指標として対象者95人のクラスタ化を試みた。心理的距離を素点のままでユークリッド距離を計算し、群平均法を実行した。結果として、デンドログラムから4クラスタを適当とし、それぞれのクラスタの特徴づけを行うことにした。結果として、クラスタ1とクラスタ2は多数派であり、それぞれ $N=38$ （男子20人、女子18人）、 $N=34$ （男子17人、女子17人）だった。これに対して、クラスタ3は $N=7$ 人（男子2人、女子5人）、クラスタ4は $N=16$ 人（男子6人、女子10人）であり、相対的に少数派であった。

これらのクラスタの相互の比較のため、心理的距離を従属変数とした4クラスタ×親の性別（父母）×青年期3時期（中学生・高校生・大学生）の分散分析を行った。その結果、3要因の二次の交互作用が有意だった（ $F(6,182)=4.017$ ,  $p=0.001$ ,  $effect\ size\ f=0.364$ ）。単純交互作用の検定の結果、クラスタ4の対象者においてのみ親の性別（父母）×青年期3時期の交互作用が有意だった（ $F(2,30)=5.839$ ,  $adjusted\ p=0.011$ ,  $effect\ size\ f=0.624$ ）。以下、他のクラスタも含めて事後検定の結果を統合した全体のプロフィール（心理的距離の平均値の変化）は図1のようになった。



注：□内の\*は単純交互作用分析により有意だった要因を表し（ $p<.05$ ），nsは有意でなかった要因を表す。

図1 各クラスタにおける青年期3時期の父母との心理的距離の変化



クラスタ1は対象者全体の40%を占める多数派であり、父母との心理的距離に有意差があり(父>母)、同時にまた青年前期から中期・後期にかけて父母との心理的距離が有意に縮小する青年たちである(中>高>大)。

クラスタ2も同程度のサイズの多数派であり(全体の36%)、やはり父母との心理的距離に有意差があるが(父>母)、青年期3時期の心理的距離はほとんど変化しない(中≒高≒大)。対象者全体の傾向として析出される知見は、この2個の多数派クラスタの特徴が大きく反映していると考えられる。

これに対して、クラスタ3は極少数派であり(全体の7%)、父母との心理的距離にほとんど差がなく(父≒母)、青年前期の距離ゼロの状態からようやく中期・後期にかけて距離を置き始める青年たちである(中<高<大)。全体傾向とは逆の変化を示すが、極少数であるため全体分析においてその特徴は誤差に埋没したものとなった。

クラスタ4はクラスタ1・2に比べるとサイズが半減するが(全体の17%)、父親との心理的距離が他のクラスタに比べて異常に大きいという顕著な特徴を示す(父>母)。しかし、その疎遠な距離が青年期3時期の間に段階的に減少してゆくという青年たちである(中>高>大)。父親と対照的に、母親との心理的距離は近い距離のまま青年期全体を通して変わらない(小≒中≒大)。これがこのクラスタにおいて有意な交互作用が検出された原因である。

全体的特徴として、一つには、青年前期から後期にかけての親子関係はそれほど大きく変化するものではないといえる。ただし、多数派のクラスタ1とクラスタ2はサンプルサイズにより、それぞれの変化・不変化の特徴を互いに打ち消しあう場合があるだろう。もう一つの全体的特徴としては、母親との心理的距離は、どのクラスタも得点=2のレベルを目指しているように見える。そして、得点=2のレベルで安定して水平に推移するように見える。その心理的距離が母親との結びつきの最適水準であるともいえるだろう。そうした最適水準は、父親との心理的距離にも存在するかもしれない。図1において、父親との最適な心理的距離はクラスタ2における得点=3とするならば、これより大きい場合その距離は減少し続け(クラスタ1やクラスタ4のように)、それより小さい場合その距離は上昇し続ける(クラスタ3のように)。そうした仮説を立てることもできるが、その検証は今後の研究にゆだねたい。

#### 自尊感情と心理的自立の分析

上述の心理的距離の変化と青年の自我発達との関連性を検討するため、自尊感情と心理的自立に関する13項目の評定値について因子分析(最尤法)を行った。結果として3因子を適当としてプロマクス回転により因子負荷量を求めた。事前の主成分分析による3主成分の累積説明率は0.478だった。表4に各項目の評定値の平均と標準偏差、及びプロマクス解の因子パターンを示す。

因子パターンより、因子1(F1)は項目7「自分の将来に不安を感じますか」、項目12

「自分の将来を具体的に想像できますか」に大きな負荷量を示すことから「将来志向性」と命名した。因子2 (F2) は項目1「自分の意見をはっきり言うことができますか」、項目5「独力で物事を決めるほうですか」にプラスの負荷量を示し、項目4「つい感情にまかせて行動することがありますか」にマイナスの負荷量を示すことから「自律性」と命名した。因子3 (F3) は項目3「相手がどんな気持ちであるかわかるほうですか」、項目10「人にやさしくしたいと思っていますか」、項目11「自分には自慢できるところがありますか」に相当の負荷量を示すことから自尊感情と他者尊重の感情の両立した自我特性と解釈し「自尊・他尊性」と命名することにした。

これら3因子はそれぞれ青年期の自我発達の指標とみなされるので、「自我発達因子」と総称することにした。そして、それぞれの標準化因子得点を求め、前述した心理的距離との関連性を探ることにした。

なお、自我発達3因子のうち、将来志向性 (男子平均 0.26, 女子平均 -0.17) は男子平

表4 自尊感情・心理的自立項目の平均評定値と標準偏差  
及びプロマクス回転後の因子パターン (N=95)

	Mean	SD	F1	F2	F3
項目1	3.547	1.008	0.039	0.794	0.053
項目2	3.421	0.974	0.263	0.477	0.210
項目3	3.684	0.776	-0.099	-0.017	0.484
項目4	2.621	0.959	0.206	-0.427	0.265
項目5	3.347	0.976	0.062	0.515	-0.057
項目6	2.853	1.072	0.377	-0.164	-0.063
項目7	2.200	0.941	0.753	0.017	0.001
項目8	3.905	0.839	-0.260	0.131	0.392
項目9	3.221	0.936	0.216	-0.021	0.564
項目10	4.400	0.675	-0.212	0.117	0.449
項目11	3.547	0.920	0.202	0.070	0.435
項目12	3.179	1.021	0.670	0.143	0.029
項目13	2.105	0.831	0.087	0.123	-0.354
因子間相関					
F1	1.000				
F2	-0.059	1.000			
F3	0.066	0.156	1.000		
因子の名称	将来志向性	自律性	自尊・他尊性		

注：各項目の文面は表1参照。F1, F2, F3 は抽出された3因子を表す。



均が女子平均より有意に大きかったが ( $F(1,93)=6.767$ ,  $p=0.011$ ,  $effect\ size\ f=0.270$ ), これに対して自律性 (男子平均 0.01, 女子平均 -0.05) 及び自尊・他尊性 (男子平均 0.05, 女子平均 -0.01) では有意な男女差は見られなかった ( $Fs<1$ )。

#### 心理的距離の変化と自我発達因子の関連性の分析

親子間の心理的距離の変化と、子の自我発達因子との関連性を探るため、自我発達3因子それぞれを目的変数とした回帰分析を行うことにした。これら3因子間の相関は -0.059 ~ 0.156 に止まったので、因子毎に回帰分析を実行した。目的変数は自我発達因子の各標準化因子得点を用いた。説明変数は父親・母親との現在の心理的距離 (以下「父現在距離」「母現在距離」), 現在距離に対する高校生のときの距離の増減 (以下「父高校増減」「母高校増減」), 高校生のときの距離に対する中学生のときの距離の増減 (以下「父中学増減」「母中学増減」), 及びダミー変数として「男女」の計7変数とした。全ての説明変数は対象者の質問紙に対する回答を素点のまま用いた (男女の値は 1, 2 とした)。

まず、クラスタ1の対象者 ( $N=38$ ) についてステップワイズ増減法, 情報量基準  $BIC$  による回帰分析を行った。その結果, 選出されたモデルを標準化偏回帰係数を用いて示すと「将来志向性 =  $-0.390 \times$  母中学増減  $+0.433 \times$  父高校増減  $-0.301 \times$  男女」, 「自律性 =  $-0.388 \times$  父現在距離」, 及び「自尊・他尊性 =  $-0.399 \times$  母現在距離  $+0.346 \times$  母中学増減」であった (各係数の検定等の詳細は表5参照)。

表5 クラスタ1の対象者の回帰分析の結果 ( $N=38$ )

目的変数：将来志向性 ( $R^2=0.248$ , $F(3,34)=3.729$ , $p=0.020$ )					
説明変数	偏回帰係数	標準誤差	$t$ 値	$p$ 値	$stb$
母中学増減	-0.389	0.160	-2.426	0.021	-0.390
父高校増減	0.516	0.191	2.704	0.011	0.433
男 女	-0.519	0.266	-1.948	0.060	-0.301
目的変数：自律性 ( $R^2=0.151$ , $F(1,36)=6.376$ , $p=0.016$ )					
説明変数	偏回帰係数	標準誤差	$t$ 値	$p$ 値	$stb$
父現在距離	-0.210	0.083	-2.525	0.016	-0.388
目的変数：自尊・他尊性 ( $R^2=0.216$ , $F(2,35)=4.811$ , $p=0.014$ )					
説明変数	偏回帰係数	標準誤差	$t$ 値	$p$ 値	$stb$
母現在距離	-0.294	0.113	-2.596	0.014	-0.399
母中学増減	0.332	0.147	2.252	0.031	0.346

注： $stb$  は標準化偏回帰係数を表す。

以下、各因子について順番に解釈すると、クラスタ1の青年たちの将来志向性については、母親との中学生のときの距離が高校生るときよりも大きいほど低く（逆にいえば中学から高校にかけて母に近づくほど将来志向性は低くなる）、また父との高校生ときの距離が大学生るときよりも大きいほど高い（高校から大学にかけて父に近づくほど将来志向性は高くなる）ということが示された（それぞれ  $stb = -0.390, 0.433$ ）。この結果から、青年の将来志向性の発達に対する父母の異なる方向への形成圧が示唆される。特に高校から大学にかけて父親への接近が起こるかどうか、将来志向性の発達を促すキーになると考えられる。

自律性については、父親との現在の心理的距離が負の関連性を示した（ $stb = -0.388$ ）。つまり、青年の自律性は父親との現在の距離が近いほど高い。このことから、大学生になった青年が、成人モデルとして積極的に父親を取り入れたり父親に同一化したりする過程が推察される。

自尊・他尊性については、母親との現在の心理的距離が小さいほど高く、また母親との中学生のときの心理的距離が高校生るときよりも大きいほど高い（中学から高校にかけて母親に近づくほど自尊・他尊性は高くなる）ということが示された（それぞれ  $stb = -0.399, 0.346$ ）。したがって、自尊・他尊性の発達には特に中学生から高校生にかけての母親への接近が関連し、その促進的な影響が現在まで続いていることが示唆される。また、この結果から、青年たちが自分自身の自己認知や他者との付き合い方をめぐって母親との心理的・実地的なコミュニケーションや相互作用をさかんに行っている状況が想像される。

以上のクラスタ1は青年期全体を通じて両親にだんだんと近接してゆく青年たちであった。上述の結果において、親子間の心理的距離の漸近的变化に伴って彼らの自我発達が進行するという一定の強さの関連性が確かめられた。

次に、クラスタ2の対象者（ $N=34$ ）について、回帰分析の結果、選出されたモデルは「将来志向性 =  $-0.433 \times$  男女」のみであった。モデル全体の説明率は有意であり（ $R^2 = 0.187$ ,  $F(1,32) = 3.729$ ,  $p = 0.011$ ）、男子（値=1）の将来志向性が女子（値=2）よりも高いことが示された。しかしながら、親子間の心理的距離の変化が子の自我発達と関連するというモデルは、3因子いずれを目的変数とした場合も選出されなかった。クラスタ2の対象者は、青年期全体を通して親子間の心理的距離がほとんど変化しない青年たちである。おそらく親との安定した距離関係を基盤として、むしろ親以外の対人関係のなかで自我発達を進めている青年たちではないかと想像される。

親子関係と青年の自我発達との関連について多くの先行研究はある程度の関連性を報告しているが、かなり弱い相関による解釈も少なくない。時折、関連性に否定的な研究も散見する。岩原（2003）は青年の親に対する愛と力の認知と生活の充実感は関連しないことを報告している。また、山本・岡本（2008）も親子関係と大学生のアイデンティティ達成との関連性を見いだせず、その代わりに親以外の他者との対人関係を有力な影響要因とし

て示している。

本研究でも、試みにクラスタ1とクラスタ2をコミにして分析してみたところ（ $N=75$ ）、有意な関連性は全く得られなくなった。おそらく先行研究は、青年期全体にわたる親子関係の変化の異なるパターンを識別することなく、異質な変化パターンの青年たちを混在させたまま単一グループとして抽出していたのかもしれない。もしそうなら、本研究で多数派であったクラスタ1とクラスタ2の相対的人数比率により知見の出方が左右されることになるだろう。すなわち、もしクラスタ1の青年たちが多ければ有意な関連性が見いだせるが、逆にクラスタ2の青年たちが多ければ関連性が希釈されるか全く見いだせなくなるということが起こる。その意味で、今後の研究にとって親子関係の変化パターンに注目することは必須の留意事項であるといえる。

なお、今回、クラスタ3・4は成員が極少だったため分析しなかった（できなかった）。もちろん上述したクラスタ1・2もサンプルサイズは全く不十分であるので、ここで示した分析結果が追試を必要とすることも必定である。

### 結論

本研究は、青年前期から青年後期まで青年期全体にわたる親子関係の変化を検討する重要性に鑑み企画された。また、そうした青年期全体を通観しうるような数量化という測定上の困難を克服するため親子間の心理的距離尺度を開発的に導入した。その結果、青年前期・中期・後期における親との心理的距離について異なる4つの変化パターンを見いだした。そのうち2つのパターンは多数派のパターンであり、両者の成員で対象者全体の約8割を占めた。一方のパターンは父母との心理的距離が青年期を通してだんだんと小さくなってゆく「変化するパターン」であり、その心理的距離の変化は青年たちの将来志向性や自尊・他尊性の発達と関連した。これに対して他方は、親との心理的距離が青年期を通してほとんど変わらない「変化しないパターン」であり、その距離は青年たちの自我発達と全く関連性が見られなかった。こうした変化するパターンと変化しないパターンは、互いに他の特徴を打ち消しあうということに注意する必要がある。この変化・不変化のパターンを示す青年たちは結果的にほぼ同数ずつ（どちらも対象者全体の約4割）であり、かつ両者を合わせると約8割になるという事実も対象者のサンプリングにおいて知見の析出に重大な影響を及ぼす一因として留意すべきだろう。

これらとは別の変化パターンは少数派（全体の約2割）にすぎないが、一方は、青年期の始まりの両親とのほとんど接触的状态から徐々に距離をとってゆこうとする青年たちであり、また他方は、やはり青年期の始まりの父親とのあまりに大きすぎる距離を徐々に縮めてゆこうとする青年たちである。こうした特徴的な変化を示す青年たちの存在もまた本研究は見いだしたが、残念ながら彼らの自我発達の様相は今後の研究テーマに止まる。

心理的距離尺度それ自体は、まだまだ未開拓の尺度である。しかし、水本・山根（2011）



が予想した親子関係の「密着型→自立型」「依存葛藤型→関係疎型」という2分割的な適応・不適応類型とは異なる、もっと実態的な4つの変化パターンを見いだすことができた。この成果において、この分野に新たな視界を切り開き、有益な知見をもたらすことが期待される尺度といえるだろう。

さらにまた、親子関係についての従来の多種多様な尺度のほとんどが、対象者を当の研究概念に直面させ意味的判断を求める意識的指標であることを考えると、心理的距離はそれとは別次元の指標として扱える可能性をもつだろう。心理的距離は対人関係の意識的内容を総括し、それらを距離というイメージに一括変換する擬似物理的な認知過程に基づくと考えられる。その意味において、直接的・意識的な従来の指標に関連しうる基準指標の一つとして用いることができるかもしれない。今後、心理的距離尺度はその指標としてのふるまい方とともに、その生成過程についても集中的に研究されてよい有望なテーマといえるだろう。

#### 引用文献

- Benjamini, Y., & Hochberg, Y. (1995). Controlling the false discovery rate: A practical and powerful approach to multiple testing. *Journal of the Royal Statistical Society Series B*, 57, 289-300.
- 藤田ミナ・岡本祐子 (2009). 青年期における母娘関係とアイデンティティとの関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8, 121-132.
- Gjerde, P., & Shimizu, H. (1995). Family relationships and adolescent development in Japan. *Journal of Research on Adolescence*, 5, 281-318.
- 石川満佐育 (2013). 女子学生における第二反抗期の経験と親子関係, アイデンティティの確立との関連の検討 鹿児島県立短期大学紀要, 64, 1-18.
- 岩原まどか (2003). 青年が認識する親への愛情や尊敬と、同一視および充実感との関連 発達心理学研究, 14, 39-50.
- 上村桃香 (2015). 親子関係の継持的認識と青年期の自尊心や進路選択との関連性 信州大学教育学部平成27年度卒業論文
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006). 青年期における心理的自立(Ⅱ) —心理的自立尺度の作成— 北海道教育大学紀要(教育科学編), 56, 17-30
- 水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係—「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討— 教育心理学研究, 59, 462-473.
- 仲野好重・桜本和也 (2005). 親子関係における期待と青年期のアイデンティティ形成の相互性について 大手前大学社会文化学部論集, 6, 111-126.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理

学研究, 12, 65-71

庄司知明・藤田尚文 (2000). 子どもから見た親の期待について—親子関係診断尺度 (EICA) との関連から— 高知大学教育学部研究報告第2部, 9, 45-55.

杉村和美・畑野 快・徳岡 大・西田若葉・佐藤裕樹・保木井啓史 (2013). 日本人大学生における対人関係領域のアイデンティティにとって重要な他者は誰か?—選択された他者別に検討した, アイデンティティ形成の3次元と人格, 心理社会的問題, 親子関係との関連— 広島大学大学院教育学科研究紀要 第三部, 62, 89-97.

高橋 彩 (2008). 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 16, 159-170.

高橋 彩 (2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 17, 208-219.

高橋由利子 (2001). 青年期の自我同一性の発達と親子関係について 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 220.

山本彩留子・岡本祐子 (2008). 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ, 対人態度の関連性 広島大学心理学研究, 8, 107-120.

#### 付記

本論文は上村 (2015) におけるデータを用いて, 別個に方法論的に問題を定位し直し当該データの再分析により新たな知見の導出を意図したものである。